

V-2

Cyclin D3 陽性の多発性骨髓腫症例の検討

中村裕一¹、伊藤善啓¹、佐藤泰隆²、掛川絵美¹、別所正美¹

埼玉医科大学血液内科¹、小川赤十字病院血液内科²

【目的】多発性骨髓腫では Cyclin(CCN) D1, D2, D3 のいずれかが過剰発現していることが知られているが、前 2 者に比し D3 陽性例の頻度は少なく、臨床的特徴については十分には明らかにされてはいない。今回、我々は自施設における CCND3 陽性骨髓腫症例について検討した。

【方法】当科での骨髓腫症例検体にて CCND の発現につき RT-PCR でスクリーニングし、CCND 陽性であったものについては、さらにゲノム DNA を用い LD(1)-PCR 法による解析を行った。

【結果】RT-PCR において 46 例中 4 例に CCND3 の過剰発現が認められた。これらの症例の平均年齢は 66 歳 (51-76) で、診断時の病期は全例が (DS)あるいは 3(ISS)期であった。M 蛋白については、IgD 型 1 例、BJP 型 2 例、非分泌型 1 例であった。3 例で化学療法が施行され、うち 1 例は PD となり 13 ヶ月で死亡、他の 2 例は MP 療法にて病勢の安定が得られている。いずれの症例も通常の染色体分析では t(6;14)(p21;q32)転座は検出されなかったが、3 例において CCND3 遺伝子の 5'側と IgH 遺伝子 switching 領域との結合が確認された。1 例にて、6p21 の転座切断点の CCND3 の反対側にある TBN 遺伝子と JH, I μ とのキメラ mRNA の形成がみられた。

【結論】CCND3 陽性あるいは t(6;14)(p21;q32)転座を有する骨髓腫は本邦でも一定の頻度で存在し、一つの亜群を形成するものと考えられる。臨床的特徴や予後に対する影響については、今後症例を蓄積し検討する必要がある。